ブレインブレイカー

KNT

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ブレインブレイカー

【Ｎコード】
Ｎ２２３２Ｃ

【作者名】
ＫＮＴ

【あらすじ】
濃厚な１５分のトリップ。ＳＥＸ＋ＤＲＵＧ＋Ｒ＆ａｍｐ；Ｒを書いてみたくて書いたものです。

深夜二時。

ソニーの大きなスピーカーからは、ジミー・イート・ワールドが流れている。

祐希は、全裸で仰向けになり、全く動かない。

ＣＤが終わり、チェンジャーがエアロスミスの古いアルバムを選んだ。

流れ出したのは、ホワット・イット・テイクス。

静かに始まるイントロが、祐希の脳に閃光を走らせる。

ギターの音色が脳内で色づき、ゆっくりうねりながら涙腺を優しく広げる。

……　ｍｙ…　ｇｉｒｌｆｒｉｅｎｄ，　ｔｈｅｒｅ，ｓ　ａｎ　ａｎｏｔｈｅｒ　ｄｉａｍｏｎｄ　ｒｉｎｇ

ゆっくりと低い、流れるようなスティーヴン・タイラーの声が、懐かしさと驚きと、寝返りを誘う。

キーが高くなり、ハスキーに消えていく声に、祐希は感謝と同情の涙を流していた。

目をきつく閉じ、歯を食いしばる。

Ｉ ｕｓｅｄ ｔｏ ｆｅｅｌ ｙｏｕｒ ｆｉｒｅ， ｂｕｔ
ｎｏｗ ｉｔ，ｓ ｃｏｌｄ ｉｎｓｉｄｅ

全身が冷たく小刻みに震え、頭の中だけが異常に熱い。

Ｔｅｌｌ ｍｅ ｗｈａｔ ｉｔ ｔａｋｅｓ ｌｅｔ ｙｏｕ
ｇｏ

一段とキーを上げるボーカルとコーラスが、うねりを大きくし、高く舞い上げる。

濃い青と薄い青が渦を巻き、祐希の息を殺す。

高く立ち上ったうねりの向こうに、モザイクのかかった男が見える。

Ｇｉｒｌ， ｂｅｆｏｒｅ Ｉ ｍｅｔ ｙｏｕ Ｉ ｗａｓ Ｆ
ＩＮＥ

男が叫んでいる。

Ｓｐｅｎｄ ｍｅ ｕｐ ｌｉｋｅ ｍｏｎｅｙ…

男の絶叫がクローズアップされ、視界一杯に広がる。

叫ぶ男の表情に、世界の全ての悲しみを理解して、祐希は泣いた。

Ｔｅｌｌ ｍｅ ｗｈａｔ ｉｔ ｔａｋｅｓ ｌｅｔ ｙｏｕ
ｇｏ

ジョー・ペリーのギターが泣く。

祐希の背筋は反りかえって硬直し、震えた。
祐希は、この二人の天才の閃きと想像力、そして表現力に感動し、声を失っていた。
この曲があるだけで、世界は素晴らしい。
そうして、最後の一音まで堪能し、体の力を抜き、目を開けた。

振り返ると、祐希が寝ているその隣に、女がいた。
声も出ないほど驚いた。
よく知っている顔だが、誰だか分からない。
それよりも、この隣にいる女は心臓が止まるほど綺麗な顔をしている。

「曲、そんなによかった？祐希、泣いてんじゃん」
女の言葉は、全く頭に入ってこない。聞き取れるが理解できない。
「ね、ＣＤ替えていい？」
女は返事を待たずリモコンをとった。
しばらくして、トーンを押さえた、綺麗なメロディが流れ出す。
なんだったかな、この曲を知っている。誰の曲だ？

知っている曲なのに、ひどく新鮮だ。
それに、このボーカルは誰だ。神経を直撃するほどなまめかしい。
Ａ　ｃｈａｎｇｅ　ｏｆ　ｐａｃｅ　ｃｏｕｌｄ　ｒｅａｌｌｙ
ｄｏ　ｓｏｍｅ　ｇｏｏｄ
祐希は目を丸くして女を見た。
「どした？好きでしょ？この歌」
やはり、この曲は知っている歌なのだ。
しかし、はじめて聞いたような衝撃だ。
草原みたいにかすれた声、さざ波のような静かな美しいメロディ、
猫のような情熱。何より、性欲を絵にしたようなこの赤と紫のヴィ
ジョンが素晴らしい。
Ｍａｋｅ　ｕｐ　ｙｏｕｒ　ｐｒｅｔｔｙ　ｆａｃｅ
祐希は、もう一度女を見た。
「何ビックリしてんの？」
女は祐希の横に寝転がり、頬杖をついている。
キャミソールの胸元がはだけ、白い胸が見える。
祐希は手を伸ばして、胸元から手を入れた。女は祐希をするがまま
にさせ、曲を聞いている。

祐希は、その柔らかい感触に我を忘れ、膨張した股間を女に押し付けながら、夢中で胸をまさぐった。

「祐希、かんなりキマってるねえ。量、間違えたんじゃない？」

何の話か分からない。キマる？何だ？

疑問が薄く頭に浮かぶが、今はそれより、この女のカラダの素晴らしさだ。

何にも例えられないきめ細かい肌と柔らかい胸、触っているだけで吸い込まれてしまいそうだ。

キャミソールを捲り上げ、無我夢中でその胸に顔をうずめ、乳首に舌を絡ませた。

とても、この世のものとは思えない。

カラダが溶けていくのがわかる。

胸を掴む手と、乳首に絡める舌、押し当てる股間以外は、溶けて感覚がなくなってしまった。

なんなんだ、この女は。

Ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｏｎｅ　ｌｉｆｅ　ｈｅｒｅ　ｔｏ　ｍａｋｅ
ｉｔ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｍｏｖｉｅｓ

そうだ、この曲はフォー・ザ・ムービーズ、バックチェリーだ。

思い出したとき、股間から脳天を貫く電撃が走った。
祐希は声を上げた。
電撃はおさまらない。
背骨を直接なでられるような感覚に、漏れる声は止まらず、カラダは痙攣した。
「祐希、すごい固いね。気持ちいい？」
祐希はかろうじて目を開けた。
女の手が、祐希の股間に伸びている。
手がゆっくりと動くたび、祐希は気を失いそうになった。
目を閉じてはいるが、視界は真っ白で、息が詰まる。
狂いそうな感覚の中、女の魔法に堕ちていった。
「おもしろーい。もっとしたげよっか」
女は手を動かしたまま、ゆっくりと頭を動かした。
首から肩、胸から腹を這う女の唇に、祐希は窒息しそうになった。
世界で、この女にかなうものがいるのだろうか。
この魔法の前では、誰も抵抗など出来ない。
息も出来ない、漏れる声も、腰の震えも止まらない。

手にも足にも力は入らず、魔法が消えないよう祈ることしかできない。

そして、女の頭が祐希のへそを越えたとき、祐希は自分の生死を疑った。

全神経が集中し祐希の全てとなったその部分が、熱く濡れた柔らかな女の口に包まれたとき、祐希は死を感じた。

めまぐるしく交錯する光、休みなく背骨を貫く閃光、優しく包みながらまとわりつく女の口と舌、下腹部に触れる細い髪、足に置かれた魔法の指。

いま、目と耳、鼻、そして口から、体中の全てが流れ出ているのが分かる。

なるほど、こうやって人は死んで天国にいくのだな。
この女は、神か天使なのだな。
走馬灯というが、逆じゃないか。
何も思い出せないし、どうでもいい。
この魔法は、今までの全てを覆す。

音を立てて頭を動かす女が、祐希の腰に手を添え、そっと撫でた。

祐希は、カラダの中で光が破裂するのを感じて、声を上げた。

祐希が目を覚ましたとき、まだ、フォー・ザ・ムービーズが流れていた。

ＣＤは何周したんだろう。

時計を見ると、二時十五分。

Ｙｏｕ ｄｏｎ’ｔ ｈａｖｅ ｔｏ ｆａｌｌ ｔｈｅ ｐｉｅｃｅｓ， ｙｏｕ ｈａｖｅ ｔｏ ｐｒｏｖｅ ｉｔ

頭が痛い。

足と足の間に女がいる。

「イった？」

女は手で口を拭いながら聞いた。

祐希は、何も言わず目を閉じて、頭痛が消えるかどうかを確かめた。

女が股間に手を添えたまま、顔を近づける。

「ねえ、まだおっきいままだよ」

女はまだ手を放さない。固さを維持しようとゆっくり動かしている。

女は握ったまま、祐希をまたぎ腰をあわせ、下へおろそうとした。

「ムリムリ。疲れた」祐希は寝返りをうち、横をむいた。

女は不満そうに腰を上げ、体をどかせた。

「飽きたよ、この曲。止めてくんねえ？」

「信じらんない。さっき聞きながら泣いてたくせに」

女は立ちあがりながら答えた。

「何か言ってた？おれ」

「何にも言ってなかったよ。でも効きすぎてたね。あんまりいっぱい飲んだら、バカんなっちゃうよ」

量、間違えたかな。そう思って祐希はテーブルの小瓶を見た。

底に、白い固まりが三粒ほど。確かに多すぎたかもしれない

「おまえ、飲んでないの？」

「当り前でしょ。二人ともトンでたら危ないじゃん」

祐希は瓶を指でつまみ、振った。

ラベルには、手書きで　≪ｂｒａｉｎ　ｂｒｅａｋｅｒ≫

女は裸のまま、部屋の片づけを始めた。

鼻歌でフォー・ザ・ムービーズを歌ってる。

Ｙｏｕ　ｇｏｔ　ｏｎｅ　ｌｉｆｅ　ｈｅｒｅ　ｔｏ　ｍａｋｅ　ｉｔ　ｆｏｒ　ｔｈｅ　ｍｏｖｉｅｓ

明日は仕事、明後日はこの女を買い物に連れてって、なんか買ってやろうかな。

～オワリ～

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2232c/

ブレインブレイカー

2010年11月2日03時29分発行